浜島辰雄（はまじまたつお）

愛知用水の為なら死んでもよい覚悟

－地域住民の汗・涙・血の結晶を地図に－

浜島辰雄（1916 ～ 2013）
写真：愛知用水会館蔵

■生い立ち

浜島辰雄は1916（大正5）年、愛知県愛知郡豊明村（現・愛知県豊明市）の裕福な農家の5男として生まれた。 1935（昭和10）年に愛知県安城農林学校、1939（昭和14）年に三重大学農学部の前身である三重県高等農林学校を卒業した。

卒業後、南満州鉄道に入社、調査部に配属されダムの建設計画作成に従事した。その後、名古屋陸軍幼年学校教官などを勤めた。

戦後、愛知県田口農林学校を経て母校の安城農林学校教諭となった。

■愛知用水概要図の作成

1948（昭和23）年7月18日の中部日本新聞に「発展する知多の夢～その名も愛知用水」の記事を読んだ浜島辰雄は、久野庄太郎を訪ね、意気投合し行動を開始した。

二人は、先ず水路の設計から始め、水がゆっくり流れるようにするためには、平均勾配が三千分の一（3km ごとに1m下がる割合）である。そのためには取水口の標高は90m余となり、岐阜県八百津町兼山の地点（標高:95、5m）から知多半島先端までを現地踏査、愛知用水概要図を完成させた。

この計画図は、縦3、6m、横1、6mで、縮尺25,000分の1の地形図に記載された。実在の愛知用水と比較しても基本的には大差ないものである。現在、大府市にある愛知用水土地改良区で保管されている。ルートは兼山取水口から愛知県に入る。愛知県内では、犬山市から愛知池（東郷調整池）を経て知多市にある佐布里池に入る。

ここから名古屋南部工業地帯コンビナート工業用水として利用されている。さらに知多半島先端の美浜調整池に達する。最終的に海底導水管を通して篠島、日間賀島、佐久島に送水されている。

浜島辰雄が描いた愛知用水概要図
実測図：愛知用水土地改良区蔵

完成した水源の牧尾ダム　出典：『愛知用水概要』1961

■愛知用水事業の推進

1948（昭和23）年、知多半島の1市25町村すべてが参加した愛知用水開発期成会が設立された。有志15名で農林省や吉田首相に陳情し、翌年から農林省による現地調査が始まり大きく前進した。浜島辰雄は昭和27年に教師を退職、愛知用水事業に専念した。

1952（昭和27）年に愛知用水事業で建設された施設の維持管理を行う組織として愛知用水土地改良区を設立、昭和30年に愛知用水公団が設立され、昭和32年に国際復興開発銀行と借款契約書を締結、総工費422億円のうち490万ドル（＝約17億円）を世界銀行から借りた。

愛知用水事業は我が国初の大規模総合開発事業で、木曽川総合開発事業の一環として始まり、水源となる牧尾ダム建設工事に着工、併せて幹線・支線水路などの建設に着手した。その後、苦難の工事が続いたが工事開始わずか5年後の1961（昭和36）年9月に通水が開始され、知多半島はかんがいの恵みに浴する地域になった。

愛知用水通水後の1965（昭和40）年に知多浄水場の近くに佐布里池が建設された。これにより名古屋南部工業地帯のコンビナート群に工業用水が送水され、愛知県の工業化に大きく貢献した。

（寺沢安正）